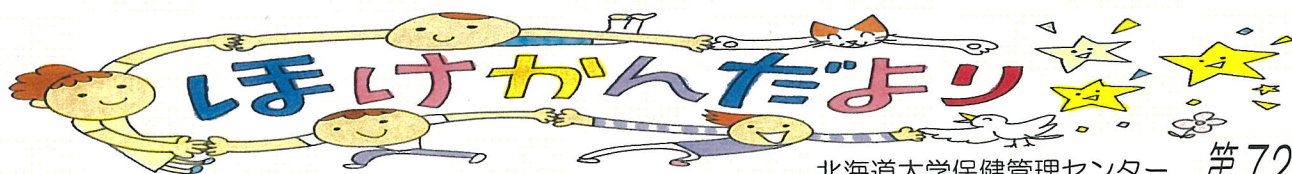




Title	卵のぬくもり
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 72, 1-1
Issue Date	2007-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39251
Type	article
File Information	hemmi_hokekan72.pdf





「卵のぬくもり」

理事・副学長 逸見 勝 亮

◇休日に茨城県八郷で有機農業を営むGの農園を訪ねた。Gとは10年ぶりの再会である。イノシシ・貂などの生息域と接する山際で、稲・麦・大豆・野菜を栽培し、数百羽の鶏を飼っている。Gが僕に最初に指示した作業は鶏卵の収穫である。籾殻を敷いたバケツに稲藁に生んだ卵を静かに重ねた。60個ほど集めた卵のいくつかはまだ暖かかった。

◇今は鶏卵は10個190円前後で買えるありふれた安い食材で、教育学部幼稚園児に「今日のお弁当のおかずは卵焼き?」と聞くとほぼ的中する、弁当副菜の代表格でもある。しかし、1950年代までは鶏卵は牛乳・バターとともに滋養豊富で貴重な食品と考えられていた。僕は、祖母の使いで卵を籾殻を敷いた菓子折に並べて病気見舞いに届けたことがある。

◇父は日本製鋼所室蘭製作所鶯沢社宅（6軒長屋）の

殻となると教えられたので真剣であった。卵の収穫は最も楽しい仕事であった。藁の間の暖かい卵に触れる至福感は喩えようがない。祖父母は雛を孵しもした。巣箱に磁器製擬似卵を置いて20個ほど卵を並べて抱かせた。幾日か過ぎるとヒヨコが「生まれる」のは不思議だった。年の暮れには曾祖父が鶏をつぶした。脚を縛ってから頸動脈を切り、熱湯につけて羽をむしる。ときどき研ぎながら小刀で切り分ける無言の手さばきに見飽きることはなかった。

◇祖父母は、社宅の裏を「勝手」に耕地にして、ニラ・大根・トウキビ・キャベツ・ホウレンソウ・カボチャ・ジャガイモ・小豆・インゲン・イチゴなどを栽培し、主要な野菜は自給した。肥料は人糞と鶏糞、ときに過リン酸石灰を購入した。木灰をまぶした種薯を植え、キャベツの青虫を退治するのは子どもの仕事であった。社宅街では、どの家でも自給可能なほどに野菜を栽培し、鶏・ウサギを飼っていたというわけではない。6軒長屋に暮らした折には他の5軒では何も飼ってはいなかった。3号乙と同じような造りの社宅は鶯沢には22軒あったが、我が家以外では、七面鳥・ウサギを飼っている家がそれぞれ1軒あっただけである。このような差違は、労働者の出自（特に妻のそれ）や家族構成・家計の事情などによっていただろう。畑仕事も鶏・ウサギ飼育も、一年中土と天候と作物のことを考える知恵と手間が要るからである。父は艦船エンジンのクランクシャフト・砲身などの旋盤工、祖父は砂製鋳型をつくるための木型製造工であったが、父は福井県細呂木の、祖父母は秋田県阿仁の農家の出身である。父と祖父母は十代半ばに郷里を離れるまで学業のかたわら土と暮らしており、身体が「農」を記憶していた。

◇さて、Gの次なる指示は、鶏への水やり、その次は麦踏みである。その次は稲刈（長さ6~8m、重さ20kg前後の丸太）の片づけ。汗が出たのはこの作業だけであった。Gは要するに僕の労働能力と意欲を瀬踏みしたのである。帰りがけに注文した卵は2日後に届いた。鶏肉ソーセージ・ミブナ・大根・うどんなどのおまけ付きである。早速ソーセージとミブナを蒸し焼きにして食べた。芳香を発し、美味極上。有機栽培は安心だ。今回は薪割り程度の指示はあろうが、まずは卵の収穫をさせてもらおう。太陽光以外の自然のぬくもりはそう多くはない

（鶯沢社宅遠景）

上から4段目6軒長屋左端が1948年まで過ごした社宅、最上段右から2軒目右半分が鶯沢社宅3号乙。

社宅は母恋富（162m）北東山麓を階段状に整地して建てられている。山腹には段々畑の痕跡も。1972年頃の撮影だが、社宅は50年代のままである。

（写真提供：吉田絃子氏）



物置軒下でシャモを、8畳間の出窓下にウサギを飼っていた。シャモは闘鶏と肉、ウサギは毛皮と肉が目的である。ゴザで囲った「闘鶏場」で血を流すシャモの猛々しい眼光と堅い肉、ウサギのチョッキと耳掛け、ウサギの種付け、皮を鞣す父の背中……食糧に乏しい1947年頃の労働者街の光景である。

◇父の死後、曾祖父・祖父母と一緒に日本製鋼所室蘭製作所鶯沢社宅3号乙で暮らすことになった。ここでも軒下で名古屋コーチン・白色レグホン・山羊を飼った。山羊は末弟の健康のために乳を搾るのが目的である。鶏には野菜屑・貝殻・米糠などを与えていた。貝殻を割り、山羊の餌に草を刈り、卵を収穫するのは子どもの仕事であった。貝殻は丈夫な卵の